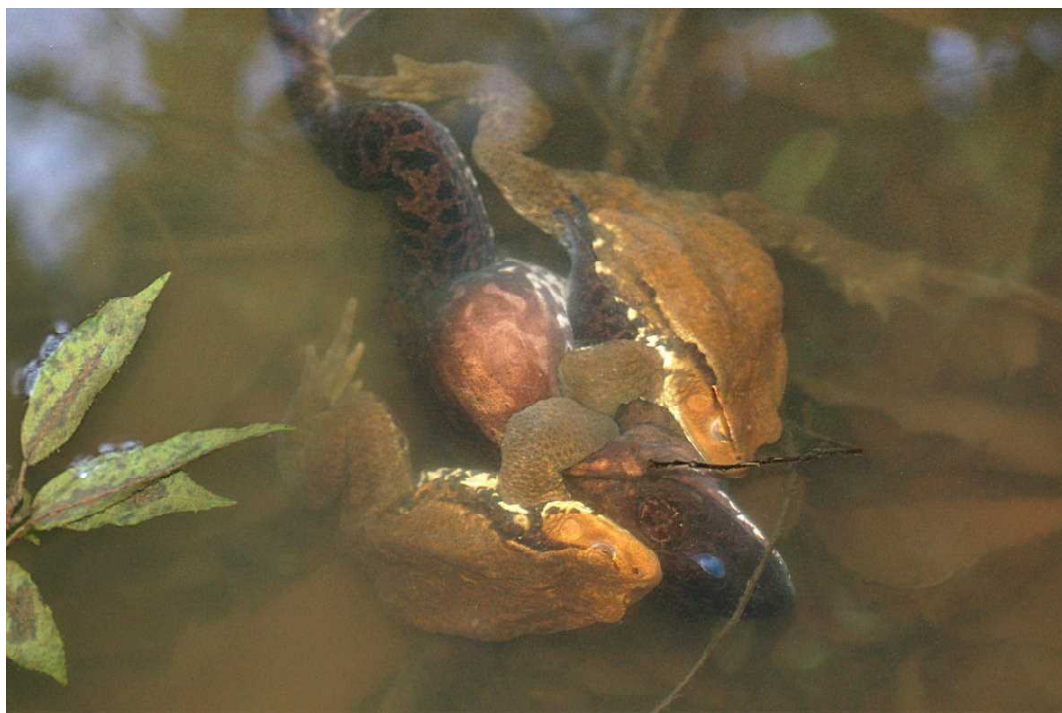


春を待つ生きものたち



2008年3月26日16時40分、岩舟町にあるため池では、小さな事件が起こっていた。この日、いち早く冬眠から醒めた「アズマヒキガエル」の雄たち2匹が、ため池に降りてきた。雄たちは、卵を産むために池に降りてくる雌を今か今かと待っていた。ヒキガエルの雄には、この時期、動くものなら何でも雌と思いこみ、抱きつく習性がある。人間の手でも、動くものなら例外ではない。この日は、たまたま、このため池に住んでいた「ウシガエル」がその犠牲になってしまった。強い力で締め付けられたウシガエルは、あえなく命を落とすことになるだろう。

実は、ヒキガエルの雄が、同じくヒキガエルの雄を雌と間違って抱きついてしまうことは、よくあることなのだ。しかし、その時は、抱きつかれた雄は「おい、おれは雄だぞ」という合図に、リリースコールという独特な鳴き声を出す。すると、抱きついた雄は、「間違えました。」と、あわてて、抱きつくのをやめるのだ。

ところが、そのような鳴き声を持たないウシガエルは、自分がヒキガエルの雌ではないことを伝える術をしらない。それどころか、おそらく、自分がなぜ、こんな目に遭っていることすら、理解できないのではないだろうか。ウシガエルにとっては、理不尽この上ない事態なのだ。

ヒキガエルは、「動くものに抱きつき、繁殖を行う」という本能に従って行動しているにすぎないが、それが機械的な反射であるが故に、悲劇は往々にして起こる。こうした事態に「ウシガエルがかわいそう」という気持ちもないではないが、むしろ、ヒキガエルの子孫を残すことにかかる生命力のすごさに圧倒され、しばし言葉を失う。